

異論・反論を想定した小論文の書き方

—学習者同士の交流・相互評価を通して—

国語表現

1 授業実践のねらいと背景

グローバル化が進み、人々の価値観も多様化している今日において、課題解決のためには、自分とは異なる他者の主張や立場を踏まえた表現能力が求められる。異論・反論を想定した小論文の書き方を学ぶことは、このような社会で他者とともに共生していくための言語能力を身に付けることにつながる。課題に対する考えを深め、主張を支える根拠となるものを収集、整理し、それらを筋道立てて構成すること、そしてそれを他者に理解、納得してもらうこと、こうした論理的思考力を養成するのに小論文指導は有効である。

今回の実践では、小論文とはどのようなものなのか、という基礎的事項の確認からはじまり、論題に対する意見の作り方（立論）、反論の想定の方、情報収集の仕方の指導に力点を置いた。特に立論の仕方と反論の想定の方は、学習者にとって身近な題材をいくつか与え、その方法の習得に多くの時間を割いた。なぜなら、方法の習得を評価の重点とすることで、単に論題に対する認識を深めることのみならず、そのような過程で磨かれ身に付いていく思考力や表現力が、先に述べたような今日の社会で生きていく力になると考えるからである。また、学習者同士の交流や相互評価を指導過程の要所に組み込むことで、協働的な学習として本実践を位置付けた。

【学校・学習者の状況】

全ての教室に電子白板の導入、無線LAN化が整い、学習環境が大きく変化した。本授業は、高校3年生必修選択科目で行ったものである。学習者のほとんどが、本講座を希望して受講しているため、授業に対する取り組みは全体としては良い。なお、受講者は25名である。

2 単元指導計画

【科目】国語表現 【実施時期】3年生1学期

【学習活動の概要】

1 単元名 異論・反論を想定した小論文の書き方		
2 単元の目標 (1)主張が伝わるように論理の構成を工夫して書こうとする。(関心・意欲・態度) (2)主張が伝わるように論理の構成を工夫して書く。(書く能力) 指導事項(1)ウ (3)論理の構成の仕方を理解する。(知識・理解)		
3 取り上げる言語活動と教材 (1)言語活動 情報を収集、整理し、小論文にまとめる。 (2)教材 ワークシート		
4 単元の具体的な評価規準		
関心・意欲・態度	書く能力	知識・理解
異論・反論を想定しながら、自分の意見を筋道立てて書こうとしている。	異論・反論を想定しながら、自分の意見を筋道立てて書いている。	論理の構成の仕方を理解している。
5 単元の指導計画		
次	学習活動	言語活動に関する指導上の留意点
第1次	1. 単元全体の説明をする。 2. 意見と根拠を短文で表現する。 3. いくつかの論題を与え、立論、反論、主張を作成する。	・意見と根拠の区別が理解できているかどうかを確認する。 ・立論と主張の一貫性、立論に対して妥当な反論の想定ができていないかを確認する。
第2次	1. 小論文の構成を理解する。 2. これまでの学習を踏まえ、構成メモを作成する。 3. 論題「18歳選挙権についてどう考えるか」に関わる情報収集を行う。	・これまでの学習とのつながりを確認する。段落構成、効果的な接続語の使い方を確認する。 ・論題に対する問題意識を喚起させる工夫を行う。 ・どのような情報や材料が必要なのか、きちんと選別できるように指導する。
第3次	1. 小論文を800字程度で作成する。 2. 作成した小論文を相互評価する。	・推敲の観点を示す。 ・相互評価の観点を示す。

4 授業実践の実際

第1次（3時限目）

●指導目標

1 反論を想定した主張の仕方について理解する。

●本時の展開

- 1 論題に対してどのように立論をするのかを理解する。
- 2 立論、反論、主張の思考トレーニングを行い、それらのメモを作成する。
- 3 作成したメモを相互評価する。

●指導の実際

1 論題に対してどのように立論をするのかを理解する。

教師 与えられた論題に対してどのような立論をするか、迷うところだと思う。きちんとした立論を考えることができると、その後の反論の想定、さらにそれを踏まえての主張の展開がしやすくなる。そのトレーニングをしてみよう。

論題がどのように与えられることが多いのか、その実際のパターンをみてみる。また立論の裏返し反論になることを意識させた。「問い」の形を取らない論題の場合、意見を述べるにふさわしい「問い」自体を自らつくることの必要性を説明した。

論題は身近なものから抽象的なものまでを用意し、生徒の思考を働かせることができるように工夫した。例えば、「年賀状は手書きがよいか、電子メールがよいか」はそのまま問いに答えれば意見を述べるができるが、「メディアの報道のあり方について」の場合は意見を述べるにふさわしい問いを自ら考え出さなければならない。そのためには問題となる事実やその背景について知識がなければ問いそのものを見つけ出すこともできないことを確認した。このように、あえて難しい論題も与えることで、小論文作成においては、その論題に対する基本的な知識、背景理解が必要であることも強調した。

2 立論、反論、主張の思考トレーニングを行い、それらのメモを作成する。

教師 次は、立論に対して反論を想定しよう。またその反論に反論するかたちで主張をしよう。反論の想定は、説得力ある小論文とするために極

めて重要だ。またこの3点セットが小論文の本論部分の展開になる。
反論の想定は、主張を説得力あるものにするため重要な過程であることを自覚させた。またペアの相互評価によって、立論と主張が一貫していることを確認させた。❗ポイント1▶ p.118

3 作成したメモを相互評価する。

教師 メモを相互評価してみよう。立論に対してきちんと反論ができているか、その上で主張がなされているか、確認してみよう。また、書かれている反論以外にも反論ができないかどうか、考えてみよう。

評価のポイントは、立論に対して反論が想定できているか、反論に対する主張が、反論の根拠を的確に批判できているか、である。ペアで相互評価を行った後、電子白板を用いて、学習者全体で意見交流をした。

〈例：三点セットメモ(生徒作成例)〉

◎年賀状は手書きがよいか、電子メールがよいか

【立論】 年賀状は手書きがよい。なぜなら、電子メールとは違って、実体として相手の手元に残り、何かの手違いで消去してしまうことも無いから。

【反論】 年賀状は電子メールがよい。なぜなら、実体のある手書きの年賀状であっても手違いで捨てたりしてしまうこともあり、また、電子メールは実体が無いからうっかり破いてしまったり、時間の経過で文字がかすれたりすることも無いから。

【主張】 実体のある手書きの年賀状は破いてしまう恐れや時間と共に劣化してしまうからこそ電子メールより大切に扱おうという気持ちが出るから年賀状は手書きがよい。

この時、反論の根拠と主張が呼応しているかを点検させた。異論・反論との対話構造が成立していることが必要であること、そこがずれていると論理的な展開にはならないことを全体で確認した。特に学習者にとって関心が薄い論題は、教師も適宜アドバイスし、学習者の思考を促す働きかけをした。

この実践ここがポイント❶

■授業の解説

本実践は、小論文を「書かせる前」の指導を充実させ、「書き方」の習得にねらいを定めて単元化したものである。特に、異論・反論を想定させることで説得力のある論証を考えさせているところに注目点がある。❶ポイント❶▶ p.113 AO入試の導入以来、小論文指導が活性化してきたが、受験対策としてだけでなく国語科における書く能力を育てる指導として十分に展開しているかといえば、そうともいえないだろう。指導の実態も、書かせて添削をするという一回性の対応が多く、系統的に論理的な文章表現力を育てる指導はまだ根付いていないのが実情であろう。文章表現指導は手間がかかる印象があり、現場の多忙感からも十分には取り組みにくいのかもしれない。しかし、根拠に基づき意見を述べる小論文実践は、論理的文章の基礎トレーニングとして取り組みやすいといえる。

生徒にとって、「意見」がはじめからあるとは限らない。むしろ、小論文で問われる論題については、日常考えたこともないものが多いだろう。「〇〇について、あなたの意見を述べなさい」といわれても、何を書いてもいいかわからず筆が止まってしまう学習者は多い。では、「意見」そのものがなければ、どうしたらいいのだろうか。

- ①論題の事実そのものを知る → 知らなければ調べる
- ②問いに答える → 問いが示されていないならば自分で立てる
- ③根拠に支えられる → 根拠となる事実やデータの強さを考える
- ④反論をくぐる → 異論・反論の根拠を疑う

少なくともこれらの条件が意見産出には必要になる。そもそも「意見を述べる」前提条件を考えると、黒か白か、どちらが真か決着がついていない状況設定が不可欠である。これは必ずしも二択ということの意味しない。「私はこう考える」という「意見」は、しいていえばAでもBでもCでもなく「こう考える」という、他との差異によって「意見」たりうるのである。そうだとすれば、意見を述べる相手は、自分とは異なる考えの持ち主であり、説得力とはその異論を持つ相手に対しての説得力ということになる。だからこそ、異論反論を想定するという学習は、「意見」を持ち合わせていない学

習者に、ものごとを両面から考えさせ、論理的思考力を育むには良いトレーニングになるのである。

何を書くかある程度明らかになってきたら、次にどのように書くかを考える段階である。思うままに筆の流れに任せて書くのは、随筆や詩ではいいかもしれないが、論理的文章の場合は、筋道が明瞭であること、論旨に飛躍や穴がないことが求められるのであり、書き慣れていない学習者の場合は事前に論展開の設計図を描くことや、それに伴う**思考の再構成**が必要となる。本実践でも、序論・本論・結論の三段構成で書かせている。❷ポイント❷▶ p.114 これは機能としての骨格であり、段落や章の数ではない。すなわち、なぜ序論・本論・結論で書くのか、ということである。序論では論点を示すことが必要になる。問題提起や結論の予告といった形で、文章の冒頭で早めに論点を提示することは読み手に対する配慮であり、文章全体のフレームを示すことになる。結論では、序論で提示した論点と合致する答えが端的に述べられていなければならない。つまり、序論で示した「問い」に対する「答え」を明確に示すのが結論の役割であり、そして、この両者をつなぎ、なぜそういえるのかを論証するのが本論の役割なのである。構成メモの指導も、単に書くこととする内容を想起し書き込むためのメモというだけでなく、こうした「問い」と「答え」と「根拠」という関係性を明確に意識させて三者のつながりを確認しながら論理性を高めていく材料として扱う必要がある。

■今後の展望

二つの方向性を考えたい。一つは、国語科だけでなく各教科等における論述、レポート作成に活かす道である。小論文の書き方で学んだ論理性は、各教科での学習、とりわけ書く活動に直結する。また、大学生、社会人にとっても必要不可欠な能力である。カリキュラム・マネジメントの観点からも国語科で系統的に指導すべき事項であろう。もう一つは、高大接続でも重要視されている批判的思考力の育成につながる道である。異論・反論の想定と、その反証という学習は、角度を変えてクリティカル・リーディングの学習にも生かすことができる。例えば、評論文の学習を論旨の読み取りに止めず、筆者の主張を支える根拠を検証したり、他の論者と比較して考察したりといった展開も考えられる。

(幸田国広)